

YAGURADA SITE

# 矢倉田遺跡

— 平成 5 年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う  
埋 藏 文 化 財 緊 急 発 掘 調 査 報 告 書 —

1994

茅野市教育委員会

## 序 文

矢倉田遺跡の緊急発掘調査は、県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う記録保存を茅野市教育委員会が実施したものであります。

事前調査では広い範囲に遺物の散布が認められていましたが、発掘調査によって土坑が散在する遺跡であることが判明しました。矢倉田遺跡の周辺には、縄文時代前期と前期末の様式遺跡である神ノ木遺跡や下島遺跡など日本考古学史上で著名な遺跡がありますが、矢倉田遺跡のように土坑のみからなる遺跡は、市内でも類例の少なかった遺跡です。今後の調査により、周辺の集落遺跡との関連から縄文時代の生活領域と縄文時代の暮らしを考えるうえで、矢倉田遺跡の遺構の方は注目すべきものであると考えます。

発掘調査にあたり長野県教育委員会など各関係機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力により、発掘調査を無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成6年2月

茅野市教育委員会

教育長 両角 昭二

## 例 言

1. 本書は、長野県茅野市北山地区芹ヶ沢に所在する矢倉田遺跡の、県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫および県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘現場における記録および遺物、図面の整理は調査員、調査補助員が行ない、写真撮影、原稿執筆は、現場担当調査員が行なった。
4. 出土品、調査記録は茅野市文化財調査室が保管している。

## 目 次

### 序文・例言

第I章 調査経緯	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の方法と経過	1
第II章 遺跡の位置と環境	3
第1節 周辺の遺跡	3
第2節 自然環境と遺跡の層序	5
第III章 遺構と遺物	8
第IV章 結語	11

# 第Ⅰ章 調査経緯

## 第1節 発掘調査に至るまでの経過

本遺跡の保護については平成4年10月5日に、長野県教育委員会文化課、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会文化財調査室により平成5年度農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財保護についての協議の席上で話し合われた。その協議結果として、平成5年3月11日付4教文第7-90-36号平成5年度県営は場整備事業（茅野市芹ヶ沢地区）にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出された。茅野市教育委員会は、平成5年4月20日付で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託の契約を長野県諏訪地方事務所長と締結し、4月17日より現地調査に入った。本遺跡の範囲は、表面採集による遺物の散布状況、地形などから設定されたものであるが、遺物の散布状況が散漫であることから、調査範囲設定のために、遺跡の立地する台地の先端部分からは南北方向にトレーニングを設定し、試掘調査を行った。その結果、遺構分布範囲は台地先端部分と中央部分に限られることが判明したため、調査区を3地点に分けて設定した（第2図）。調査面積の減少により事業内容の変更が必要となり、平成5年5月17日付5教文第7-12-3号平成5年度県営圃場整備事業（茅野市芹ヶ沢地区）にかかる埋蔵文化財の保護についてが、長野県教育委員会から再度提出された。その内容は、事業地内にかかる2,048m<sup>2</sup>以上を発掘調査し、記録保存を図るというものであった。

## 第2節 調査の方法と経過

### 1. 調査の経過

本調査は5月17日より行い、台地先端部の調査区より順次東へと調査を進めた。表土剥ぎは重機により行なったが、借り上げの関係から3地点を一度に実施したため、調査期間後半には確認面が乾燥し、遺構検出作業が困難になる場面が生じた。A地点の調査は遺構検出から遺構内の調査を統合して行い、B地点とC地点では遺構検出を行った後、B地点から遺構内調査を行った。B、C地点の調査と平行してA地点の実測作業を行い、B、C地点の遺構実測作業は遺構内調査終了後に、調査員と調査補助員が行った。実測作業、器材撤収が終了したのは6月23日であった。遺物、記録の整理と報告書作成は、他遺跡調査終了後の12月から行なった。

### 2. 調査の方法

遺構検出は漸移層とローム層の境界を確認面として行ったが、一部耕作による擾乱が著しい部分については、ローム層上部を確認面とした。

遺構覆土および遺跡の土層観察は、調査員が行なった。観察には土層観察表を用い、観察項目

として粒径、締り、粘性、含有物の種類と大きさ、量をとりあげた。含有物の大きさについては最大長を記録し、含有量は多い、少ない、稀、なしの4段階に区分した。含有量の観察基準は、遺構間の相対的な比較による。大部分の遺構と遺跡上層で、粒径、締り、粘性の違いが識別し得なかったため、遺構覆土の記述からは例外を除き上記3点の観察結果を省略した。遺構の土層観察結果は、各遺構の図の脇に付し、「ローム粒子が多い」を「ローム粒子 多」と表記した。

遺物の取り上げは遺構単位とし、作業は調査員、調査補助員が行った。

遺構の実測は平板測量により行った。基準点、水準点測量は、株式会社榎本に委託した。水準点は2点を求め、BM.1 = 1002.283m, BM.2 = 997.701mである。基準点は公共座標第VII系  $y = -24540$  と  $x = 2720$  を基準軸とし、この交点にAを置いた。Aの他に、BからFの5点を設定した（第2図）。それぞれの座標値は以下の通りである。B  $x = 2710, y = -24540$ , C  $x = 2750, y = -24580$ , D  $x = 2730, y = -24580$ , E  $x = 2790, y = -24640$ , F  $x = 2770, y = -24640$

### 3. 表面採集における遺物の散布状況

試掘調査に入る前に遺跡範囲内の踏査を行った。採集できた遺物は少量で、黒曜石製の石器を採集できる場所が、B地点とA地点の2地点に限られた。採集された遺物は、黒曜石製石器と縄文土器破片、近世から近代の陶磁器破片である。

### 4. 調査の体制

#### 調査組織

調査主体者	両角 昭二	(茅野市教育委員会教育長)
事務局	原 充	(茅野市教育委員会教育次長)
	永田 光弘	(茅野市教育委員会文化財調査室長)
	鵜飼 卓雄	(茅野市教育委員会文化財調査室係長)
	両角 一大	(茅野市教育委員会文化財調査室主任)
	大月 三千代	(茅野市教育委員会文化財調査室主事補)
調査担当	守矢 昌文	(茅野市教育委員会文化財調査室主任)
	小林 深志	(茅野市教育委員会文化財調査室指導主事)
	小池 康史	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)
	功刀 司	(茅野市教育委員会文化財調査室主事) (現場担当、報告書作成)
	百瀬 一郎	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)
	小林 健治	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)
	柳川 美司	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)

#### 発掘調査・整理作業協力者

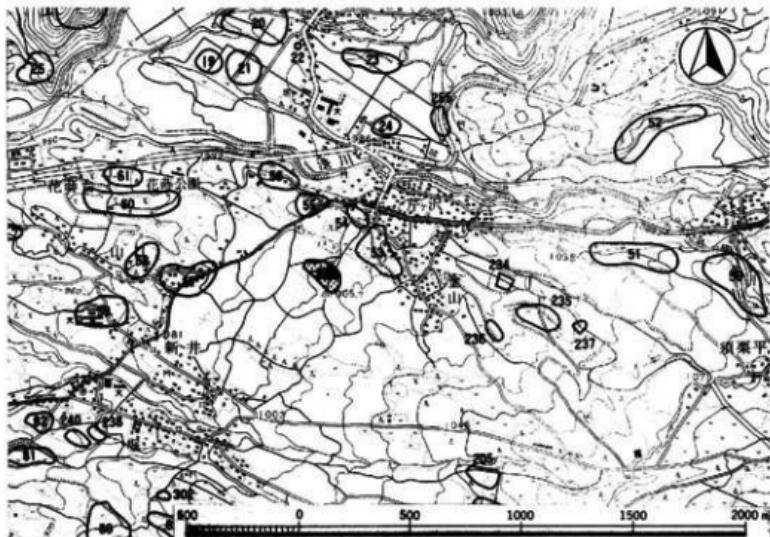
赤堀彰子 欠島恵美子 (補助員)

牛山秀子 柿沢曉子 柿沢みどり 金子清春 北沢ゆきゑ 木村忠行 小松貞恵 小松たみ江  
篠原リカ子 立木利治 水谷ちとせ 宮坂和子 吉田勇

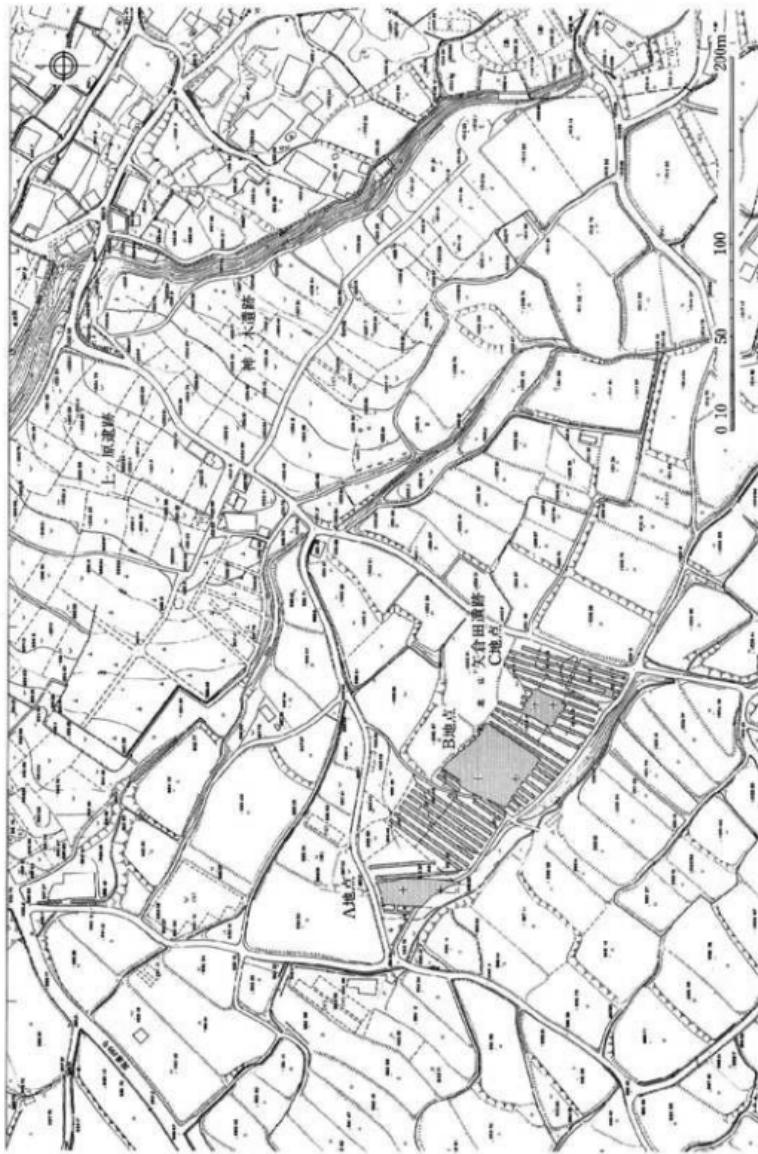
## 第II章 遺跡の位置と環境

### 第1節 周辺の遺跡

矢倉田遺跡（第1図No233）の周辺には、神ノ木式土器の様式遺跡である神ノ木遺跡（No53）の他、上ッ原遺跡（No54）、下ッ原遺跡（No55）、下島式土器の様式遺跡である下島遺跡（No56）がある。これらの遺跡は淡川に沿う断崖の縁辺に、並ぶように発見されている。矢倉田遺跡は、並列する諸遺跡より尾根ひとつ分山麓側に立地している。矢倉田遺跡の南西から南東にかけて、すなわち八ヶ岳山麓に分け入った場所には遺跡が発見されておらず、珍部坂A遺跡（No238）、菖蒲沢B遺跡（No205）を結ぶ範囲内が遺跡分布の空白地帯となっている。これらの遺跡のうち、発掘調査が行われたのは神ノ木遺跡と下島遺跡である。神ノ木遺跡では繩文時代前期前半の住居址2基が発掘され、下島遺跡では前中期の所謂小竪穴と土器が出土している。上ッ原遺跡では中期中葉から中期後半の遺物が、下ッ原遺跡では中期後半の遺物が採集されている。このほか下島遺跡では、弥生時代の住居址1基が調査されている（鶴飼 1983、宮坂 1986）。



第2図 矢倉田遺跡の発掘区域と地形 (1/3,000)



## 第2節 自然環境と遺跡の層序

矢倉田遺跡は八ヶ岳西麓の山麓台地上に位置する。山麓台地は本遺跡の北、直線距離にして約400mで渋川の形成する渋谷に至り、八ヶ岳西麓の端部となる（第1図）。遺跡は、東から西に走る尾根状の台地に立地している（図版1-1）。本遺跡からの眺望はよく、北は渋川の渋谷越しに、音無川の形成した扇状地上の湯川地区の集落を、西には米沢北大塙の扇状地を一望することができる。遺跡は標高999mから1004mにかけてひろがっており、現在は畑地、水田として利用されている。遺跡周辺の山麓台地は開析の度合いが弱く、遺跡の南北は現地形で比高差約3mの浅い谷によって限られている。西は台地末端となり、東には山麓台地が続いている（第2図）。

調査区の土層堆積状況は台地平坦面で浅く、耕作土の直下がローム層となっている所もある。

ローム層上面で確認された台地先端部は、現地形で観察される先端部より東側に寄っており、深い谷によりわざかに分岐している。台地先端部と谷底の比高差は約1mである（第4図）。台地先端部にみられるローム層（第3図A地点東壁②）は、谷への斜面ではA地点西壁⑥層と斑状に混じり合いつながら観察できるが、谷底ではみられない。ローム層とA地点西壁⑥層との上下関係を断面で確認することはできなかった。

### A地点基本層序（第3図）

#### 西壁層序

①黒褐色土 耕作土。

②暗褐色土 粒子は細かく、縮りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、1cm以下の風化した橙色礫を稀に含む。

③黒褐色土 粒子は細かく、縮りがあって、粘性は強い。ローム粒子、2mm以下の炭化物粒子を少量含む。1.5cm以下の黄白色礫を稀に含む。

④暗黃褐色土： 粒子は細かく、縮りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、5cm以下の橙色礫を少量含む他、1.5cm以下のロームブロック、黄白色礫を稀に含む。③層と⑤層の漸移層である。

⑤黄褐色土： 粒子は細かく、縮りがあって、粘性は弱い。12cm以下のロームブロックを少量含む。ロームブロックは下位に向うにつれ大きくなる。やや崩れた輪郭のはっきりしないロームブロックである。他に、6cm以下の黄白色礫、2.5cm以下の白色礫、2cm以下の橙色礫を多く含む。礫は多孔質で、調査区断面の肉眼観察では、黄白色礫が最も多く含まれ、以下橙色礫、白色礫の順にその量を減ずる。

⑥黄褐色土（ローム層） 粒子は粗く、縮りがあって、粘性は弱い。1mm以下の青灰色粒子を多く、赤色粒子と白色粒子を少量含む。他に、3mm以下の橙色礫、白色礫、青灰色礫、黄白色礫を多く含む。礫では黄白色礫が最も多く、以下橙色礫、白色礫、青灰色礫の順にその量を減する。

#### 東壁層序

①暗褐色土 耕作土。

②黄褐色土(ローム層) 粒子は細かく、縮りがあって、粘性は弱い。1mm以下の微小な白色粒子、青灰色粒子を少量含む。5mm以下の風化が激しい黄灰色礫を稀に含む。①層との層界は明瞭である。

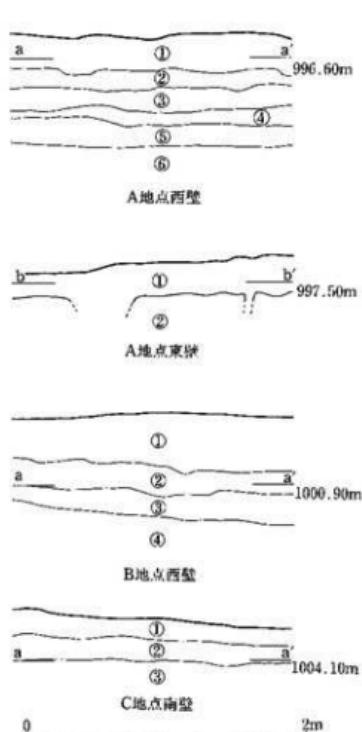
#### B地点西壁層序 (第3図)

①暗褐色土 耕作土。

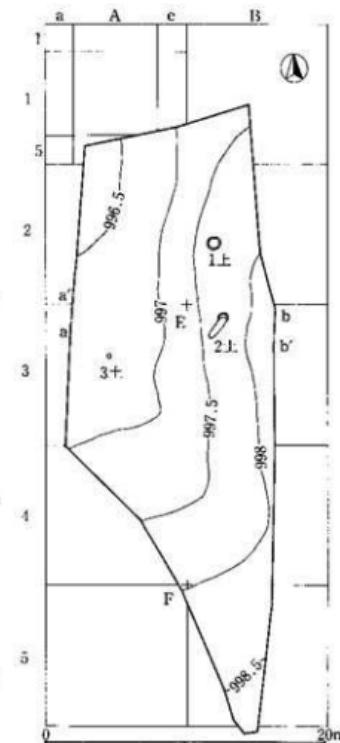
②暗黃褐色土 粒子は細かく、縮りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、1cm以下の輪郭が崩れたロームブロックを少量含む。

③黄褐色土 粒子は細かく、縮りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、10cm以下の輪郭が崩れたロームブロックを多く含む。

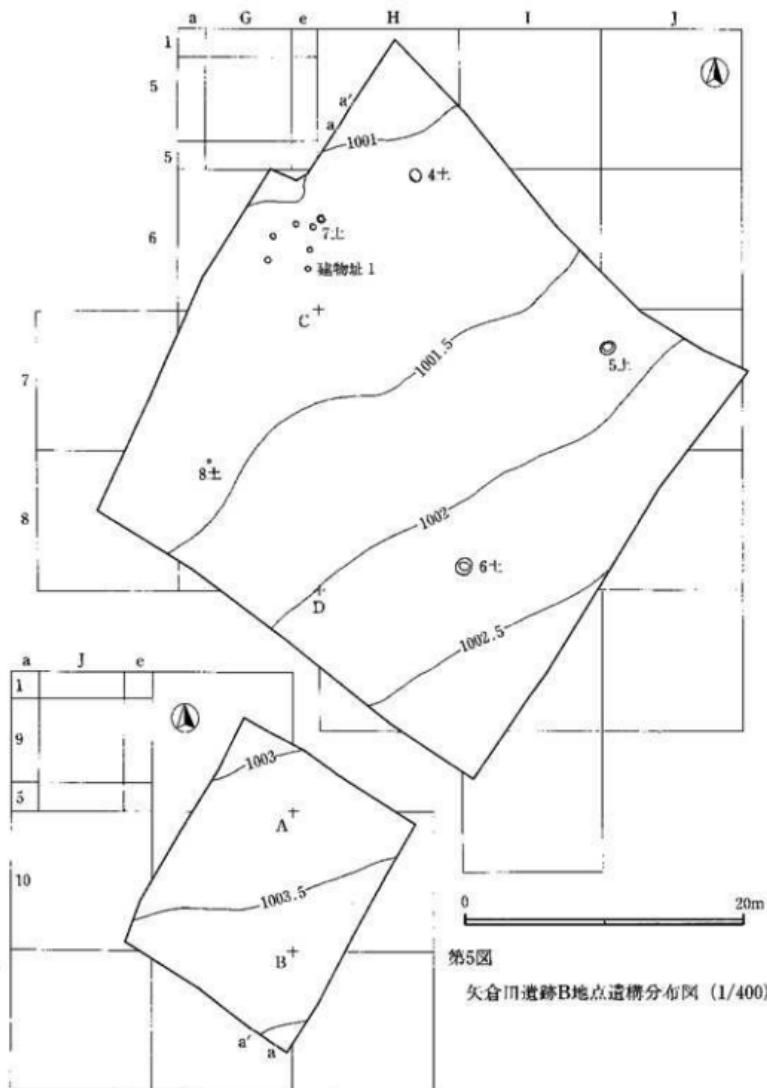
④黄褐色土(ローム層) 粒子は細かく、縮りがあって、粘性は弱い。1mm以下の白色粒子、青灰色粒子を多く含む。



第3図 矢倉田遺跡I層断面図 (1/40)



第4図 矢倉田遺跡A地点遺構分布図 (1/400)



第6図 矢倉川遺跡C地点遺構分布図 (1/400)

#### C 地点南壁層序（第3図）

- ①暗褐色土 耕作土。
- ②暗黃褐色土 粒子は細かく、繊りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、6mm以下のロームブロックを少量含む他、5mm以下の白色礫を稀に含む。白色礫は多孔質である。
- ③黄褐色土（ローム層） 粒子は細かく、繊りがあって、粘性は弱い。1mm以下の白色粒子、青灰色粒子を多く含む。

遺跡の基本層序は把握できず、遺構覆土と遺跡上層の対応関係も認められなかった。

## 第III章 遺構と遺物

### 1. 遺構

本遺跡から検出された遺構は、土坑と建物址の2種類のみである。

土坑の平面形には差がないが、規模と形態から3種類に大別される。第Ⅰ類は、口径124cmから55cm、深さ67cmから10cmで、従来タライ型、桶型とされていた土坑である。第1、2、5、6、7号土坑がこれにあたる。この類型の土坑は深さからは2種に分類できるが、平面形と大きさではほとんど差がない。相対的に深くつくられている土坑第Ⅰ類aには、第5、6号土坑があり、比較的浅い土坑第Ⅰ類bは第1、2、7号土坑である。第Ⅰ類aは立上がりが屈曲し、壁面に稜をもち外傾するのに対し、第Ⅰ類bは立上がりが丸みを帯びて不明瞭で、壁面は外傾する。第7号土坑は平面規模で第1、2号土坑とは分類できるが、1基のみであることからあえて分類せず、第Ⅰ類aに含めておく。

第Ⅱ類は、いわゆる袋状土坑である。第4号土坑がこれにあたり、土坑壁面が軽く内傾する。

第Ⅲ類は口径が小さいものである。建物址を構成する柱穴に似ている。第3、8号土坑がある。

#### (1) 土坑

##### 第Ⅰ類

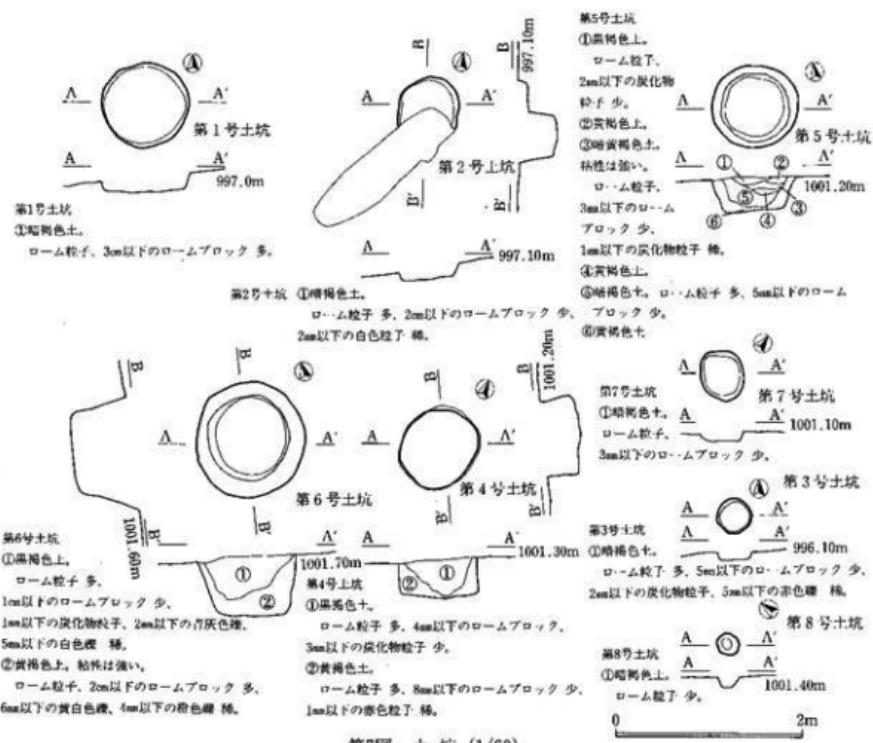
###### 第1号土坑（第7図、図版2-3）

平面形は円形で、底面の形状も円形である。最大径が94cm、深さ21cmである。坑底は平坦で、かたく締っている。立上がりは丸みを帯びている。

###### 第2号土坑（第7図、図版2-4）

ほぼ半分を擾乱されているが、平面形はほぼ円形であると推定される。深さは計測可能な部分で最大17cmである。坑底は西に傾斜しているが、凹凸はない。

黒曜石製の剝片が1点出土した。



第7図 土坑 (1/60)

#### 第5号土坑 (第7図、図版3-1)

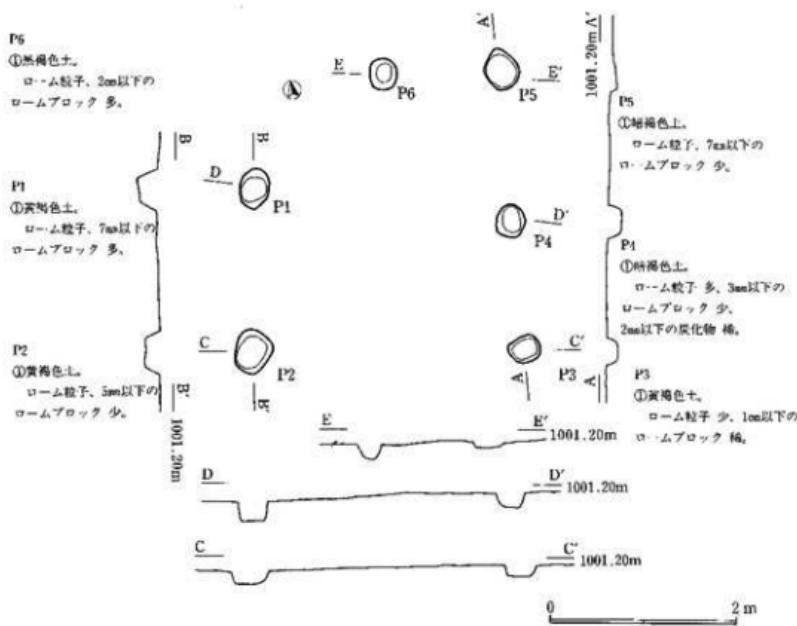
平面形は円形で、最大径は91cm、深さ38cmを測る。坑底は平坦で、かたく縮っている。立上がりは下部で湾曲した後、壁面に稜をつくる。第6号土坑に比べれば、稜より上位の壁面が強く湾曲する。

#### 第6号土坑 (第7図、図版3-2)

平面形は円形で、最大径は124cm、深さ67cmを測る。坑底は平坦で、かたく縮っている。立上がりは鋭く屈曲し、ほぼ直線をなす壁面に稜が観察できた。

#### 第7号土坑 (第7図、図版3-4)

平面形は円形であるが、隅丸方形に近い。最大長55cm、深さ10cmを測る。坑底は平坦だが軟弱である。



第8図 建物址1 (1/60)

### 第II類

#### 第4号土坑 (第7図、図版3-3)

平面形はほぼ円形であるが、やや南北方向に長い形状をみせ、長径は88cm、短径が76cmと12cmほどの差がある。深さは44cmを測る。坑底は平坦で、かたく締っている。立上がりは一部垂直に近いが、大部分は内傾している。

黒耀石製の剥片が1点出土した。

### 第III類

#### 第3号土坑 (第7図)

A地点の谷底に位置する。平面形は円形で、最大径は36cm、深さ8cmを測る。

遺構確認面はA地点西壁基本層序⑥層である。

#### 第8号土坑 (第7図)

平面形は円形で、最大径は24cm、深さ11cmを測る。

## (2) 建物址1 (第8図、図版3-5)

P1からP4までの4基は、やや崩れた方形に配列されている。P5、P6がこの4基の配列に組込まれる可能性があると考えたため、同時に報告する。出土遺物はない。

P1

平面形は楕円形で、長径43cm、短径31cm、深さ21cmを測る。坑底は平坦でかたく締っている。

P2

平面形は楕円形で、長径44cm、短径39cm、深さ16cmを測る。坑底は平坦でかたく締っている。

P3

平面形は楕円形で、長径32cm、短径28cm、深さ11cmを測る。坑底は平坦でかたく締っている。

P4

平面形は楕円形で、長径45cm、短径32cm、深さ15cmを測る。坑底は平坦でかたく締っている。

P5

楕円形で長径50cm、短径35cm、深さ6cmを測る。坑底は軟弱で、立上がりもはっきりしない。

P6

一部攪乱を受けているが、平面形は円形である。径は測定可能な部分で34cm、深さ16cmを測る。坑底はかたく締っている。壁面は緩く済出し不明瞭である。

## 第IV章 結 語

### 1. 矢倉田遺跡の性格

近年茅野市内の発掘調査において、矢倉田遺跡のように、住居址を欠き土坑群が主体となる遺跡が増加している。これまでに報告書や概報が刊行された遺跡では、上見遺跡（茅野市教育委員会 1991）、鶴川遺跡第I次調査区（茅野市教育委員会 1992）、夕立遺跡（茅野市教育委員会 1993）などがあり、いずれも縄文時代前期末から中期初頭の遺跡である。また岡谷市扇平遺跡では縄文時代前期末から中期初頭の集落とともに群在する小豎穴が検出され、その用途を中心に詳細な分析が行なわれている（長崎 1974）。以下、上記諸遺跡との比較を通して矢倉田遺跡の性格を推定してみたい。

矢倉田遺跡の特徴は、土坑第I、II類の分布状況にある。土坑第III類は検出数が少なく、検出地点も土坑第I類、II類とは異なることから分離して考えたい。土坑第I類、II類は、台地先端部A地点と台地中央のB地点の2ヶ所に約70mの距離をおいて群をなしている（第4図、5図）。特に土坑第I類aはB地点に集められている。

第6号土坑がつくられた時期は、出土した土器小破片からみると縄文時代前期末以降であると思われる。矢倉田遺跡と同じ構成をとる遺跡には、上見遺跡、鶴田遺跡、夕立遺跡があり、いずれも前期末から中期初頭の遺物を出土している。他の時期に住居址を作らず土坑のみで構成され

る遺跡が検出されていないという消極的な根拠ではあるが、矢倉田遺跡も前期末から中期初頭に位置付けられる。土坑の重複がなく、B地点において土坑第Ⅰ類aと第Ⅱ類がほぼ同じ間隔で分布していることは、穴を掘った集団が土坑相互の位置を意識していた結果であるとみることができる。このことから矢倉田遺跡の土坑は構築時期が同じであるか、隣接して短期間につくられたものであると考えられる。

上見遺跡、鶴田遺跡の上坑群にみられる類型構成は、上見遺跡で上坑第Ⅱ類とした袋状土坑が欠ける他は矢倉田遺跡と基本的に一致する。繩文時代の遺跡類型においては、墓域のみで構成された遺跡が検出されていない以上、土坑を墓穴と考えることは難しい。岡谷市扇平遺跡の分析例で貯蔵穴と考えられた所謂小幣穴（長崎 1974）と上記諸遺跡から検出された土坑は、形態的に一致する点が多いことからみて、矢倉田遺跡の土坑も植物質食料の貯蔵と他の物品の保管、管理、保護などの広い用途が想定される、広義の貯蔵穴であると考えられる。

鶴田遺跡第Ⅰ次調査区、上見遺跡の近隣には、神田頭A遺跡（茅野市教育委員会 1993）、中原遺跡など前期末から中期初頭の住居址を伴う遺跡が分布し、中原遺跡と上見遺跡は群をなすと考えられている（守矢 1992）。貯蔵穴から構成された遺跡が、集落遺跡の近くにしかも谷を隔てて形成されている点は扇平遺跡とは大きく異なる。貯蔵穴により構成される遺跡が、植物質食料の貯蔵のみを目的として営まれたとは考えにくい。食料の調理や加工作業などの共同作業は集落の近くがふさわしいことから考えて、集落近くの台地上で行なわれた活動としては植物質食料の獲得活動を想定するのが妥当である。矢倉田遺跡に近い集落遺跡の有無は不明であるが、矢倉田遺跡は上見遺跡と同様に、集落近くに営まれた貯蔵穴を伴う生業関連遺跡であると考えられ、土坑群にみられる遺構の空白地帯は生業活動が行なわれた場であったと推定される。

矢倉田遺跡から出土した遺物は少量の黒曜石製剝片以外みるべきものではなく、表面採集資料も含め、遺跡範囲全体で出土した黒曜石製石器は10点にすぎない。利器と考えられる黒曜石製石器は調整加工のある剝片1点、使用痕とみられる微細な剥離痕が観察された石器1点である。打製石斧など植物質食料の採集用具や加工具は出土していない。また使用された石器、石器製作にかかる剝片類の少ないとから、矢倉田遺跡は道具がもちこまれた場であり、利刃された期間が短く、道具の使用頻度が少なかったと推測される。

## 2. 今後の課題

矢倉田遺跡から検出された土坑は、尾根先端部A地点の土坑第Ⅰ類bからなる1群と、尾根中央B地点の第Ⅰ類a、b、Ⅱ類の4基の土坑からなる1群に大別される。さらに尾根中央の土坑群を構成する土坑のうち、土坑第Ⅰ類、第Ⅱ類は相互にはなれた位置に設けられている。こころみに茅野市内で発見された、土坑を主体とする中期初頭の遺跡での土坑分布状況を考えてみたい。鶴川遺跡では土坑の形態分類、土坑群の把握が不十分で、全体の土坑の類型構成が明記されていないが、第Ⅱ類土坑は柱穴と似た形態の土坑であり、第Ⅲ類は植物の根による搅乱を含んでいることから、袋状土坑と第Ⅰ類土坑を対象とすれば、ほぼ土坑分布の概要をつかむことができる。また

鴨田遺跡第Ⅰ次調査区北西地区の中期初頭の土器を出土した土坑は第VII群としてとらえておく。

上見遺跡の土坑の分布は大きく孤を描く1群であるととらえられるが、分布形状からすれば群別される可能性が残されている。また土坑群の周囲には遺構の空白地帯が存在し、鴨田遺跡と矢倉田遺跡にみられる土坑群間の空白地帯に相当するものと考えられる。土坑群の中には、鴨田遺跡東地区第VII群a、第VII群bのように、土坑群内に小群が把握できる可能性がみいだせる。

つまり、台地内の土坑のひろがりと土坑間距離から、矢倉田遺跡を大群とすれば、大群がほほ鴨田遺跡第Ⅰ次調査区、上見遺跡にあたり、大群の下位レベルとしての中群には、鴨田遺跡土坑第Ⅰ群から第VII群とした個々の土坑群が相当する。さらに鴨田遺跡東地区第VII群a、第VII群bが小群として識別される。前述した土坑群間の空白地帯は中群間に認められる。矢倉田遺跡A地点、B地点第4、7号土坑と、第5号土坑、第6号土坑は、土坑間距離だけからみれば4つの中群としてとらえられる。

土坑大群の継続時期をみると、矢倉田遺跡は縄文時代前期末の遺跡であり、鴨田遺跡は土坑内出土遺物からみれば諸磯C式から梨久保式後半までである。上見遺跡出土土器は晴ヶ峰式土器の特徴をもつ土器片が含まれるが、主体をなすのは梨久保式土器であり2時期に分離する根拠はない。土坑の切り合い関係からは少なくとも2回土坑がつくられていることがわかるが、遺跡の継続時期は梨久保式前半に留るものと考えたい。夕立遺跡は梨久保式期の遺跡である。

土坑中群の形成過程は、土坑の構築時期が不明なものが多いため判然としないが、鴨田遺跡土坑中群ごとの出土土器をみると、第Ⅰ次調査区第12号土坑、第152号土坑出土の小破片から、縄文時代前期末諸磯C式期に土坑第Ⅰ群とVII群が形成された可能性が推測され、晴ヶ峰式期には第Ⅰ次調査区第29号土坑出土土器から第Ⅱ群が形成されていたことがわかる。中期初頭梨久保式期になると、第Ⅳ、V、VII、VIII群が形成されていたこととなり、土坑中群が同時存在していた可能性は高い。

土坑小群は中群からの識別が困難であるとともに、時間的位置付けがはっきりしている資料は少ない。鴨田遺跡土坑第VII群aとbは、第92号土坑出土土器の編年上での位置付けが不明瞭である以上、時期差は不明であるとするほかない。ただし鴨田遺跡西地区の土坑中群第Ⅱ群、Ⅲ群を構成する個々の土坑については、密集度が他遺跡の土坑群に比べてはるかに高いことから時期差が推測できる。

扇平遺跡での「小豎穴」グループごとの時期差や鴨田遺跡の事例から、土坑中群間に時期差が認められる。さらに土坑小群内にも時間差が予測されることから、土坑小群の構築サイクルは本報告で用いた土器による年代区分よりも短かったものと考えられる。土坑中群は、個々の土坑あるいは土坑小群の累積により形成されたものであろう。矢倉田遺跡の土坑群が同時に存在した土坑中群であるとすれば、土坑が少數であることは利用頻度、利用期間が少ない状態を反映し、鴨田遺跡西地区、東地区、上見遺跡の土坑群は、土坑が同じ場所に複数回にわたり構築された姿であり、頻繁にあるいは長期間利用されたことを示すとの仮説も生れ得ると思われる。

土坑中群は同じ構成をとるとは限らない。扇平遺跡の所謂小豎穴でも、袋状小豎穴を含む群と含まない群があると報告されている。類型構成が異なる土坑中群がみられる点は、矢倉田遺跡や鶴田遺跡も扇平遺跡と同じであり、小規模な袋状土坑は矢倉田遺跡第4号土坑、鶴田遺跡土坑第V群に含まれ、他の土坑中群は矢倉山遺跡土坑第I類a、bで構成されていた。第II類とした袋状土坑と土坑第I類a、bの形態差は明瞭であることから、袋状土坑を含む土坑群と第I類a、bからなる土坑群は用途差をもっていると考えられる。袋状土坑を含まず均質な内容を示す土坑中群は、同じ目的をもって場を利用した集団の存在を示すものと考えられる。鶴田遺跡土坑中群においては、袋状土坑を含む第V群と、第IV群、V群、VI群、VII群が同時存在の可能性をもつていて、同時存在を認めるすれば、遺跡の解釈の仕方のひとつとして、ひとつの場での食料獲得活動に際し複数の労働集団が存在していた可能性をあらわすものであると考えられる。生業の場で土坑分布の単位が明らかにされるとすれば、集落遺跡での住居址群、土坑墓群の単位との比較から、それぞれの場での生活の単位の異同を考える手がかりを得ることができると思われる。

土坑中群と七坑小群の時間的な位置付けは、遺跡の解釈の仕方に大きな影響を及ぼす。今後の調査課題としては、特に土坑群間の時間的な位置付けを厳密にして行くことが重要である。また今回仮に、大群、中群、小群とした土坑群の分類が適切であるかを他遺跡の資料も含め、まとめなおす必要があると感じられる。矢倉田遺跡が貯蔵穴を伴う生業の場であるとすれば、從来植物質食料の採集が大きな比重を占めるとされてきた八ヶ岳山麓縄文中期文化の生業活動は、その成立期である縄文時代前期から中期初頭の時期から、採集という表現では包括しきれない多様性をもっていたと考えられる。

歴史学の分野では村落を、集落と生産域の組合せであると定義し、縄文時代をも視野に入れた通史的な研究が行なわれている（木村 1983）。矢倉田遺跡が生業にかかる場であり、周辺に集落が存在するとすれば、集落遺跡と生業関連遺跡の組合せとしての縄文時代村落の姿の一端が明らかにし得ることになる。遺構の數や種類が少なく、地味な印象を与える遺跡も、縄文時代人の暮らしに即した生活領域の復元に重要な意味をもつていて。茅野市城では八ヶ岳山麓を中心に戸場整備事業が進展し、毎年新たな遺跡が発掘されている。今回取り上げた諸遺跡に隣接する遺跡が、本年度も2遺跡調査され、集落と土坑群からなる遺跡の関係についてその一端が明らかにされた。今後も同じ様な遺跡が発見される可能性は大きい。山林や水川地帯など、表面採集では開発前の発見が困難な場所に存在するであろう陥穴や土坑から構成される遺跡を、地形なども手がかりにして調査して行くことにより、縄文時代の集落領域の実像が把握されると思われる。

#### 引 用 参 考 文 献

- 鵜飼 幸雄 1983 「下島遺跡」『長野県史 考古資料編全1巻(3)主要遺跡(中・南信)』(伊)長野県史刊行会
- 木村 礢 1983 「村の語る日本の歴史 古代・中世編」そし立て
- 茅野市教育委員会 1991 「上見遺跡一県営戸場整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」
- 茅野市教育委員会 1992 「鶴田遺跡」

- 茅野市教育委員会 1993 「夕立遺跡—平成4年度県営圃場整備事業桜木地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書一」
- 茅野市教育委員会 1993 「稗田頭A遺跡—平成4年度県営圃場整備事業桜木地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書」
- 長崎 元広 1974 「9.小堅穴の分析とその用途」「扇平遺跡」岡谷市教育委員会
- 宮坂 虎次 1986 「第二節 八ヶ岳西南麓の遺跡」「茅野市史 上巻」茅野市教育委員会
- 守矢 昌文 1992 「第IV章 結 語」「中原遺跡—平成3年度県営圃場整備事業桜木地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一」茅野市教育委員会



1. 矢倉田遺跡遠景（南東から）



2. A地点実測作業



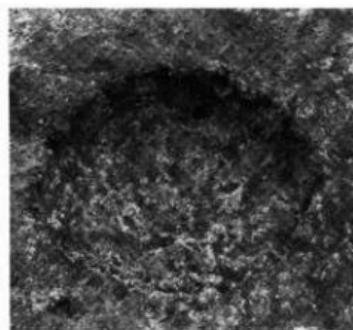
3. C地点遺構検出作業



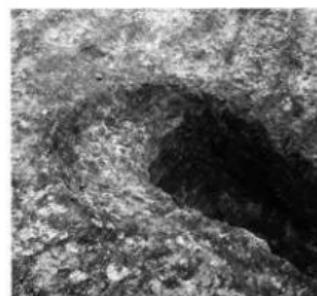
1. A地点土坑分布（南西から）



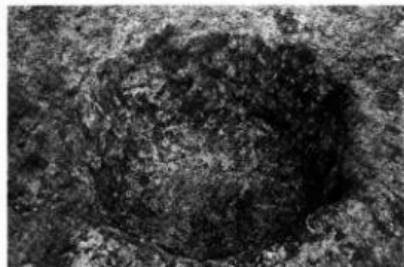
2. B地点遺構分布（南から）



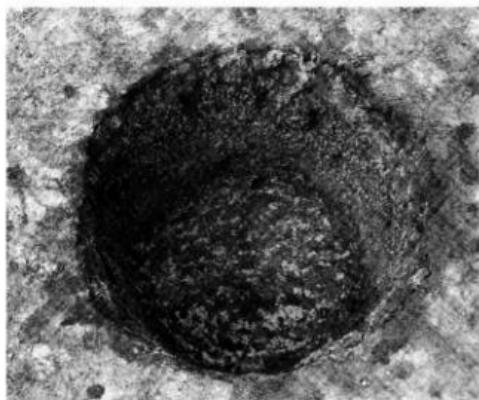
3. 第1号土坑（西から）



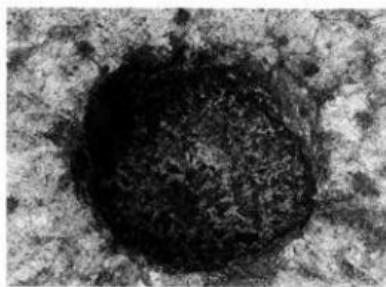
4. 第2号土坑（西から）



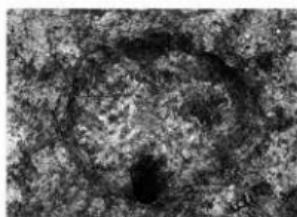
1. 第5号土坑（南から）



2. 第6号土坑（南から）



3. 第4号土坑（南から）



4. 第7号土坑（南から）



5. 建物址1.（北から）

---

## 矢倉田遺跡

平成5年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

---

平成6年3月15日 印刷  
平成6年3月17日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号  
発行 茅野市教育委員会  
印刷 長野県長野市柳原2133-5  
ほおづき書籍株式会社

---